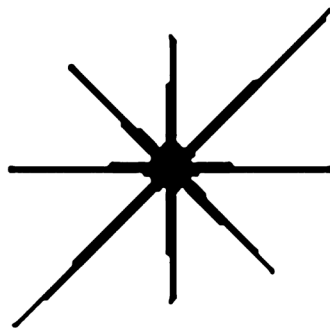


コメット通信 29

['22年12月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

変声譚 2

中村邦生

6 〈立入禁止〉

作家 KN が、かく語る。

——それで、この旅のこと、どこまで話したかな？ はい、そのエピソードからね。

「ビーハイ」と背後から声が上がったので、「何のことですか？」って私がたずねると、三人の若者は声をそろえて、「〈立入禁止〉の表示のことです」と答え、顔を見合わせて笑った。

高松から小豆島に向かう船の中で知り合った中国人留学生だ。名古屋の大学で日本語を学んでいるという。一人は女性で大学院生、二人は学部の男子学生で、三人とも親戚関係にあるらしい。

この夏に訪れた瀬戸内国際芸術祭 2022 のアート・サイトの一つに、小豆島土庄町の「迷路のまち」で、建築家・土井健史による「立入禁止」のプロジェクトがあって、日常的な意識の動きを、アートの感覚に転換させる試みだった。案内冊子に、「立入禁止の看板を見て、何を想像しますか？ ここから、あなただけの妄想アート・妄想散歩が始まります」とある。街の方々に〈立入禁止〉の掲示が下がり、その意味を推測するわけだ。

小豆島で最初に訪れた場所、旧土庄町役場に〈立入禁止〉のプレートが掛かっている。指示通りに、窓から役場のなかを覗いてみた。はからずも私が引率する形になり、留学生たちも窓に顔を寄せた。

椅子は立ち上がったときのままの位置を残して横にずれ、パソコンのモニターが床に置かれ、机にはペン立て、定規など文具類が放置されている。壁には「土淵海峡横断証明は、こちら」という案内表示が貼ったままだ。「土淵海峡」とはギネスにも登録されている世界一狭い海峡で、最少幅 9.93 メートル、10 秒もあれば軽く渡れる。横断記念に役場で証明書をくれるというわけである。受付カウンターにはウイルス感染防止のビニールカーテンが垂れているところを見ると、この場所が使われていたのは、遠い過去のことではない。

「どうしたんでしょう？」、「何が起こったのかな？」、「アートって、どこが？」と三人は口々に言う。「それを想像して、物語を考えるのが、このプロジェクトのねらいなんですよ」と私は答えながら、ふたたび旧土庄町役場を覗いた。

どうやら築 50 年の耐震上の問題で新庁舎に移ったらしいが、災害に見舞われてすべてを放置し、せっぱつまった息づかいとともに、慌ただしく立ち去った雰囲気がある。いたるところ埃だらけで、早くも廃墟の気配に満ちている。1 年ほど前まで町役場として機能していた人々の活動の空間が、瞬時に断ち切れ、荒廃の静寂に浸されている。私たちの日常の居住空間においても、その場での生活を放棄するやいなや、廃墟化していくのだ。旧土庄町役場は、移転に伴う何か隠れたドラマがあるようだ。それを訪問者それぞれが思い描くところに、このプロジェクトの狙いがあるということなのだろう。

時間による腐蝕は思いのほか早い、と私はいま改めて思う。直島の「杉本博司ギャラリー」で入手した小さなカタログ『時の回廊』に記された杉本のこんなエピソードが脳裏をよぎった。

30 年ほど前のことになるが、杉本博司はオスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』から、

虚像の思考が触発された。本人は老いずにその肖像像が老醜していくという小説だ。写真家として代表的な作品「海景」シリーズを陽光のもとに晒し、その像が劣化の度を強め、古い、消えていく経過を見てみたいと杉本は願ったのだ。1994年、ベネッセハウス・ミュージアムのテラスのコンクリート壁に、「海景」シリーズ14点を防水仕様されたフレームへ封じ込め、白日のもとに展示した。

ところが、期待は裏切られる。写真プリントは何の変化もないのに、プラスチックフレームとマット紙が劣化してしまった。「わたしが魂を込め焼いた作品は今でも若々しく、私はというと、気がつくくと老人になっていた」という、当初の願いを裏切る皮肉な事態に直面する。そして肉体は自分の作品を「縁取りする額縁」だったことに気づく。

およそ30年、太陽光の照射時間のもたらす腐蝕の進度は、プラチナ・パラジウム・プリントの方が、プラスチックとマット紙よりも遅かったのだ。結果はともかく、自分の作品を劣化の果てに消滅させるといった、ある種の自傷的な試みに、私は興味を覚えつつも何やら落ち着かない痛ましい気分が揺れていたことも正直なところだ。

何の話だっけ？ そう、〈立入禁止〉のプロジェクトだった。

留学生たちは次の場所に移動し、旧役場のピロティの南側の枯山水を思わせる庭でたずんでいる。足元に「立入禁止」のプレートが掛かり、端の欠けた灰色の陶板が放置され、アマビエにも、小動物が丸まっているようにも見える模様が彫られていた。奥の低木のなかには石碑が倒れ、庭の最も目立つところに真新しい記念碑が建ち、「雲仙南串山・島原南西部、移住記念、町木ウバメガシ」と記してある。寛永14年(1637)の島原の乱で壊滅の危機に瀕した島原半島南西部の旧串山村に、小豆島から移住したことを追懐する碑なのだが、廃屋化が進む旧庁舎の傍らにあって、このまま放置はできないはずだが、移転の予定はあるのか判然としない。これらから何を想像するか。近くには、大阪城築城の残石の場所もある。

留学生たちとはしばらく同行した後、別行動をとることになったが、別れ際、私の説明を待っていた。「迷路のまち」に仕掛けられた〈立入禁止〉のアート・サイトは、「妄想アート・妄想散歩」としてそれぞれ宝探しに似た楽しさがある。しかし、私の場合とりたてて清新な驚きの物語が立ちあがることはなかった。ほとんど作り手があらかじめ見いだした面白さを追認しているにすぎなかったのである。

しかし、重要なことは、この〈立入禁止〉のコンセプトの現実的な適用ではないか。自分の生活空間で、物語が誘い出されそうな場所に、「立入禁止」のプレートを下げてみる。すると不穏な空気がまといついてくるほどの面白さを生む「妄想アート」の場に変異するかもしれない。

「それで思い出しました」と大学院生が話を継いだ。「学生寮近くの空き地に、ドラム缶がぼつんとあるんですけど、誰かわかりませんが、木の枝を投げ込んで、生け花みたいに楽しむ人がいるみたいです。何でしょうね、あれ」

「あっ、あれか、桜の枝のときもありました」

「ドージュンファ！」

他の二人も口々に言った。

「何て言いました？ そのドージュ……」

と私が言いかけると、ふたたび大学院生が話を引き取った。

「ツツジです。すごく、にぎやかな色を集めて、それがびっくりするくらいドラム缶に合うんです。何でしょうね、あれ」

「何でしょうかね？ 私も頭の中でつぶやいた。」

7 自転車ミステリー

作家KNが、さらにかく語る。

——中国人留学生たちは、港の方向へ戻り食事処を見つけにいった。小豆島の土庄町の「迷路のまち」に仕掛けられた〈立入禁止〉のアート・サイトは14カ所あるのだが、私はそのすべてを回ったわけではない。好奇心に促されて、炎天下の移動でも意外に疲労を覚えることはなかったものの、繰り返し言うようだが、私自身の裡でとりたてて新たな物語を喚起することはなかったからだ。大体が作者による既定の驚きと発見をなぞっているだけのことで、その枠のなかでイメージを遊ばせているにすぎなかったのである。

他人がすでに面白さを見出したもの、そこには完結感とまで述べてしまうのは言い過ぎかもしれないが、少なくとも行き止り感に近い閉じられた感覚がある。〈立入禁止〉のプレートが掛かっているところに佇み、その意味を追いつつ、新たな物語を思い描こうと想像力を振り絞る姿には、一瞬、滑稽な図柄も浮かびあがる。

プレートがあること自体、すでに面白さの発見があり、物語のインスピレーションが仕込まれている。それを助走にして、新たな想像を開始する、ある意味での啓発的運動にみずから恍惚を装って付き合う愉楽もあり得るだろう。しかし、もっと心動くのは、この〈立入禁止〉のコンセプトの実践的な準用だろう。ことによると、この試みこそ企画したアーティストの思い願うことだったかもしれない。

例えば、街歩きのとときに、〈立入禁止〉プレートを携えていくのだ（心中で）。実際、東京へ帰宅後、私の散歩にこのプロジェクトが加わった。

東京の郊外の埼玉との県境、住宅街に農地の点在する一画に、住民へ貸与されている区民農園があり、中央を貫く「緑の散歩道」と称する細い農道がいつもの散歩ルートだ。キャベツ、トウモロコシ、ジャガイモ、トマトなどと、季節の折々に合わせ、それぞれの小さな菜園に作物が入り乱れる。花ばかり植えているものの、立ち枯れの目立つ農地もある。

「緑の散歩道」の中ほどまで進むと、小さな農具小屋があるのだが、その横に長いこと古自転車が放置されていた。トラックの決して安価ではないメーカーの製品だが、錆びは回っていないものの、タイヤの抜けた前輪はつぶれかかり、ハンドルも大きく歪んでいる。

ところが妙なことに、通りかかるたびにサドルに新しいプラスチック袋がかぶせてあるのだ。とても乗れるような状態ではない。よく観察すると、西武デパートと東武デパートの袋が交互にかかる。たまに、とんかつ屋の「サボテン」の袋のこともある。放置自転車なのに、なぜ雨風を防ぐプラスチック袋を律義にかぶせ直していくのか。散歩のたびにしばらく様子を窺ったりしたが、とりたてて記すべき目撃譚はない。近くで畑仕事をしている若い夫婦に訊ねたこともある。

「この自転車、放置されたままなのに、サドルにいつも新しい袋がかぶせてあるんですけど、どうしてでしょうね」

二人は顔を見合わせ、少し間をおいて、男が首を傾げながら短く答えた。

「さあ、何でしょう。わかりませんね」

女のほうからは、不審そうな視線だけが返ってきた。

なぜこの人たちは気にならないのか。ことによると、私だけに見える異変なのだろうか。「何を想像しますか？ ここから、あなただけの妄想アート・妄想散歩が始まります」という小豆島の〈立入禁止〉の看板が思い浮かんだ。この呼びかけに応じて、どのような物語を想像するか。たちまち古自転車の置かれた菜園が、私だけの未発のアート・サイトになった。

サドルに新しいビニール袋をかぶせる行為は、もちろん誰かが乗ることを前提にしている。ならば、何者か？ おそらく自転車の所有者を知っていた親しい人間だろう。ことによると、この自転車は事故の経歴があり、供養のように袋を替えに来るのだ。貸農園の入口で、忌まわしい出来事に遭遇したのかもしれない。そこでメモリアルな遺品として自転車を供え、賽物として新しいビニール袋を掛けていくことはあるだろう。では、供花でもして様子を見ようか。トラックが年配者の乗る自転車ではないことも気になる。当事者は若者だろうか。いや、何らかの事件や事故ならば、その証拠物として警察が押収するはずだ。

あるいは、変事とは関係のない事態で、故人がこの農園をこよなく愛していたので、往復に使った自転車を思い出の縁^{よすが}として、家族が置いているとか。自転車というものは前後からでも横からでも、よくよく見れば奇怪な形をしている。じっと見つめたりしていると気分が悪くなりそうだ。呪物にだってなりえる。困った。たかだか、サドルに新しいプラスチック袋がかぶせられる放置自転車などに取っ替えかされてしまった。好奇心だけでは済まない。おかしな挙動に出かねない。現にそれが始まってしまった。花畑にしている他人の区画に入り込み、青いコスモスと終わりかけた紅、黄、白、紫の細めの花茎のダリアをむしろ取り、自転車に供え、手を合わせた。

背後に人の気配が近づき、「ご不幸にあわれて、お気の毒でしたね」と声がした。おそるおそる振り向くと、どこにも人影がない。夕闇が広がりはじめ、トラックの自転車は鈍色に沈んでいる。

ふいに我に返り、いや、いや、もっと愉快的な話がいいと気を取り直した。つまりこの廃棄自転車はまだ現役で、役割を変えて、農機具として使われているのだ。サドルにまたがり、ペダルを踏みこむと、後輪が新開発の農機を引っ張るのだ……、新たな農機って、どのような？ 想像はここで行き止まり、空転する。どうあっても、〈立入禁止〉のプロジェクトは、未完の物語に行き着くのだ。

8 コンブさん

作家・志村邦彦が、かく語る。

——西武線池袋駅の地下改札口を出て、山手線に向かう通路に、電光掲示板の柱があるでしょう？ そうそう、あそこだよ、それでね、5月の中頃だったかな、その柱の前でホームレスの男が坐っていたんだ。ときどき見かける人で、年齢は還暦くらいかな、髪は切腹前の武士がちょんまげを解いたみたいで、あるいは修行僧が座禅を組んで瞑想をしている姿にも見えてね、雑踏の中なのに静寂の雰囲気をもっている感じだったんだ。服装？ 黒っぽい上着だけど、すすけてそんな色になったかもしれないし、何というか、コンブを体に巻いている様子にも見えたよ。垂れ下がった髪だって、固まって板コンブみたいだったしね。で、そのコンブさんの脇を過ぎたとき、左側に女性用の橙色のおしゃれな布製の買い物袋が置いてあってね、そこに単行本がのっかっているのに気づいたんだ。何の本かなって、いったん通り過ぎてからぐるりと戻ることにして、もう一度後ろから近づいて確かめてみたわけ。

するとね、『図解・お金の増やし方』という、超実用本だったんだ。いや、著者までは判らないよ。金を増やすと云って、元手はあるのかな、とかいろいろ頭をよぎったけど、この取り合わせが何か微笑ましくて、コンブさん、願いが叶うといいよね、と言いたくなった。その本、買ったはずはなく、どこかの金もうけをあきらめた人が捨てたやつを拾ってきたんだろうけど、現実的に金を増やす手立てもないだろうに、そうした誰かの金儲けのあきらめを引き継いで、何か思うところがあったのかな。ことによると前向きな気分させるタイトルに、心惹かれるものがあったのかもしれないね。違うかな？

でも、それはともかく、コンブさんの坐っている柱の電光掲示板の宣伝が西武園の「昭和の熱気を浴びよう！」というキャッチコピーだったのさ。何だか、不思議な取り合わせのおかしさがあるよね。ついでに、その柱の横に回ったら、何とこれが「すみっこ暮らし展」という西武デパートの展覧会案内だったわけ。この取り合わせも実に面白くて、山手線に乗ってからも残像が浮かんで、妙な具合に気持ちが昂^{たかぶ}っていたのだけれど、結局、何がそうさせたのかと考えると、切腹前の武士が瞑想する修行僧かとはともかく、このコンブさんに、橙色の布袋と『図解・お金の増やし方』、「昭和の熱気を浴びよう」と「すみっこ暮らし展」の電光掲示の宣伝が重なったことだろうな。イメージの偶然の付き合い合わせというか、偶発的な並列というか、そうしたことに心が騒いだのだと思う。まあ、そんな話なんだ。

9 かーやん

『ブラック・ノート抄』の「不器用者は魔術師なのだ」で登場した「カウンセラー」が、かく語る（本職は牧師のY介）。

——何なの、今のコンブさんの話、それだけでおしまいかい？ あなたは作家でしょう？ ずいぶんのんきに生きているんだね。職業意識が足りないということもあるけど、何だか、人間味にかけてやしない？ どうしてそのコンブさんに、もっと生身の人間として関心を持たなかったの？ まず脇にしゃがむ。そしてそっと話しかけて、「面白そうな本を読んでいますね」とか切り出して、これまでどこで何をしてきたか、いま何を考えているのか、何に困っているか、聞き出すんだよ。どのような人か、とても気になるでしょう？ 勘違いされて、大声をあげたら困る？ 勘違いって、何をだい？ ああ、そういうこと。それなら、最初に本の上に千円札を置いて、「何かおいしいものでも食べてください」と言うんだ。金を目の前に突きつけちゃだめだよ、それは失礼というもんです。「ここはいい場所ですね」とか肯定的に話し始めることが大切だよ。どういう人間か知りたいだろう？ 何かとんでもない人生のドラマを持った人かもしれないじゃないか。とにかく、どのような人か、作家的な好奇心があるはずでしょう？ どうして話しかけなかったのかなー。だって、その人の大事な人生の物語がふと覗くかもしれないなかったのに。よくそれで小説なんか書いているね。言い過ぎて悪いけど。えっ、何？ そうか、なるほど、そういうこと……。それは、それで、判らないこともないけど、小説家のタイプということになるのかな。つまり、さっきのイメージの取り合わせが、何か映像的な一つのシーンとして、ぴたっと決まったわけね。そこで完結したものを感じた。その先の物語は想像して、作り出せばいい、想像力を働かせることにこそ、小説を書く喜びを感じているということだね。実際に、話なんか聞いてしまうと、想像の妨げにすらなるかもしれないって、そう思っているのかな。違う？ そこまでは言えないか。わかりました。

この店、前にも来たよね。そう、そう、1時間も遅れちゃったときか。あそこの調理場の横にある従業員用の扉から入ってきて、びっくりさせたりして。ああ、ぼくもコーヒー、もう一杯お願いするよ。エスプレッソで。

話したこと、なかったっけ？ だいぶ前だけど、元ヤクザのホームレスというか流れ者と親しくなったことがあるんだ。知らない？ そうか、じゃ、少し長くなるけど、話すよ。

国分寺の教会にいたころの話なんだ。

ある日、帰ってくると、礼拝堂の裏庭でしゃがみ込んで、花を眺めている丸刈り男がいてね、座っ

ていても肩をいからして、只者ではない雰囲気があったんで、話しかけずに通り過ぎようとしたら、「ここに犬がいたろう？ どうしたんだ」と後ろから声をかけてきた。たしかに前任の司祭の飼っていたビアデッドコリーがいたんだけど、痩せてぼろ雑巾みたいな犬だった。

「あれは前の牧師が飼っていた犬で、もう退職していっしょに山形に引っ越しましたよ」

そう答えると、なんだか凄みのある目つきでこっちを睨むのさ。胸を衝かれたのは、顔に深い傷跡がたくさんあることだった。ふと前任者が言ったことを思い出したんだ。みずぼらしい犬に同情して、ときどきヤクザが立ち寄って頭を撫でていくけど、放っておけばすぐに立ち去るから、気にしなくていい。

「新しく越してきた人かい？」

男が聞いてきた。

「そうですよ」

と答えると意外なことを頼んできた。

「お願いがあるんだけど、いいかな？ あのさ、俺とね、ときどきでいいから静かに話をしてくれるかい？」

「いいですよ、静かに話をするのは得意だから。でも、どうして？」

「別に話があるわけじゃないけど、これまでさ、ずっと怒鳴ったり、怒鳴られたりするところばかりでね、もう、うんざりなんだよ、だからさ、静かな話にあこがれているんだ。おい、あんた、なんで笑うんだよ、ばかやろう」

「誤解しちゃだめだよ、人が笑うのは相手をばかにするときとはかぎらないからね、とても嬉しくなったから、自然と笑ったんだよ、そんなことも知らないんじゃない、そっちがばかやろうでしょう。とにかく、静かに話がしたくなったら、いつでもいらっしゃい、ほら、その牧師館に住んでいるから」

でも、それ以来、しばらく姿を見せなかった。後で知ったことだけど、男は48歳で、名前はカジキ・ミノル、漢字で書くと梶木実、親しくなってから、うちの家族たちは「かーやん」と呼ぶようになった。で、かーやんは九州の佐賀生まれなんだけど、関西のヤクザ集団に入って舎弟頭にまでなったところで、信用金庫の支店長の殺人未遂事件で服役したわけね、監獄から出てくると親分が死んでいて、組も分裂していたし、すっかり様相が変わっていた。40歳になっていたらしいけど、それを機会に上京して建設現場の日雇いで働くようになった。ところが、すぐく頭の回転が速いし、口達者で、相手の言葉尻を実にうまく捉えて、弱点を引っ張り出して追い詰める、何というか脅しの天与の才があったんだ。建設現場の労働環境は過酷だから、いくらでも文句を言って、脅かす材料はあるしね。もちろん、何度もそんなことはやめて、ユニオンと一緒に正式に改善要求をしなくちゃだめだ、何なら一緒に行ってあげるからと言ったけど、俺の仕事のやり方に文句をつけるなって怒るばかりで、顔の傷を指さしながら、こいつが脅しの便利な商売道具になっているって、自慢するんだよ。

えーと、どこまで話したっけ、そうそう、静かな話がしたければ、いつでもいらっしゃいと言ったけど、音沙汰なしで、現われたのは1カ月くらいたってからかな。

「久しぶりだけど、どうしてたの？」

「ああ、山に行ってたんだよ」

「山？ そんな趣味があるんだね。富士山でも登った？」

「ちえ、ばかいかえ、山と言ったら、山谷に決まってるだろうが。世間知らずのセンセイだな」

「悪いことしてきたんじゃないだろうね」

「悪いこと？ ちえ、何が悪いことか、ろくに考えたこともなくせに、そんなからかうような言い

方、やめてほしいね。俺はさ、釜ヶ崎に詳しいから、山谷みたいところは、慣れているんだ」

かーやんは、高校は中退だけど、子どものときから成績優秀で利発な生徒だったらしい。もう縁が切れて久しいけど、お姉さんが二人いて、姉妹とも進学校に進んで、大学も出たと聞いたけど、くわしいことは話しながらなかった。一度、正月にやってきて、代わりに上の姉さんのところに電話をしてくれって頼まれたことがあってね、用件は訪ねて行っていいかということだったけど、ろくに話をしないうちに切られてしまった。次に下の姉のところにもかけたんだけど、本人が出た後、すぐに夫の声に代わって、怒鳴られてしまった。その様子をそばで見っていたかーやんは、やっぱりだめかって笑い出してね。ところが、そのあと我が家でおせちと雑煮をご馳走したんだけど、終始黙ったままで、涙目で食べていたんだ。姿かっこうも、見るからにホームレスみたいだったから、ちょっと古いんだけど、マフラーとジャケットとコートをあげたら、いい正月だってはしゃぎだしてね。ついでに、風呂にも入っていった。

日曜の礼拝にも顔を出すようになって、いつも一番後ろの席で聞いていたんだけど、教会員たちが怖がって、誰も話しかけないし、「先生、どうして、あんな人を呼んだんですか」って、苦情も出たりした。でも、力仕事なんか積極的手伝うし、ときどき当意即妙の冗談なんかも言うものだから、だんだん皆さんとなじんでよかったよ。なかなかの読書家で、教会の本棚からキリスト教の入門的な本から、カール・バルトの新書本まで借りていった。

でもね、こんなこともあったんだ。いつもの通りの日曜日、かーやんは一番後ろの席に座っていたわけね。すると献身的に働いているし、すごく思いやりのある初老の女性教会員が、「さあ、さあ、ご遠慮なく前の方にお座りになってください、いっしょに参りましょう」と言って手を差しのべたとたん、「うるせい、ここが俺の席だ」って大声を出したのさ。一瞬、女性もひるんだけど、「あら、そうでしたね。ごめんなさい。余計なことを申し上げました。私は、少し耳が遠いもので、後ろだと聞こえづらいじゃないかって、つい考えてしまうんです」と落ち着いて笑顔を返したのは、さすがだった。

後でかーやんに、こう説明したんだ。

「あのかたは、わけあってお孫さんを引き取って、二人暮らしだったんだけど、そのお孫さん、一年前に事故で亡くなったんだ。でも、本当に思いやりのある方で、みんな、いつも助けられているんだよ」「そうか、どなったりして、悪かった。今度謝っておくから、心配しないでくれ。でもさ、その程度の不幸な人間、俺の周りにはごろごろいたぜ」

「きみさ、何をばかなこと言ってるの。その程度って、どういうことだ」

「わかっているよ。わかっているから、そんなに怒るなよ」

アパートの家賃も滞りがちだし、とにかく生活基盤の立て直しをしないとどうにもならないので、国分寺市役所へいっしょに出向き、生活困窮者の援助を頼んでみたんだ。幸いにも、福祉担当の若い役人がとても親切で、書類を整えてくれて、生活保護が受けられるようになってね、ちゃんとした生活ができるようになるなんて夢みただって、本人はとても感激していた。やれやれだったよ。

前任者の飼い犬もかわいがっていたけど、こんなささくれだった男でも、とても動物好きで異変にすぐに気づくところがあった。我が家に、ポチってという犬みたいな名前の猫がいたんだけど、あるとき様子がおかしいって言い張るんで、動物病院に連れて行ったんだ。そしたら、左脚の関節に水が溜まっていた。

さっきの取り合わせの妙の話じゃないけど、想像すると面白くない？ 犬みたいに見える猫を抱いた坊主頭の爺つい元ヤクザが作務衣むすえに草履をはいて先に立ち、後を牧師が従い、動物病院に小走りで行かう姿って、映像的にどう？ そう、普通か。まあ、いいや。

こんなこともあった。夜の12時ころに帰ってくると、執務室に明かりがついていて、かーやんがぼくを待っていたみたいなんだ。

「どうした？ 何かあったか？」って聞いたら、「何もないよ」とそっけなく言って部屋を出て行ったのさ。気になって、門のところまで見送ると、力のない声で、「おふくろ、俺のこと聞きに来なかったよな？」と言うのさ。

「えっ、おかあさん？ 来てないと思うよ。どうして？」

「そんなら、いいよ。忘れてくれ」

「見える予定はあるの？」

「ばかいい、そんなこと知ってるはずがないだろう」

「お母さまと会えるように、何か方法を考えてみようか？」

「くだらんこと考えるじゃないよ、事情も知らなくせに、そんな芝居じみたこと、よく言えるな。あのよ、おれな、おふくろに会ったら、きっと首絞めて殺すかもしれんよ」

そんな物騒なことを言っているのに、剣呑な表情はなくて、薄明かりのなかで心なしか泣き顔だったように記憶している。

ぼくがいないときにもよく現われたりして、そういうときには必ず牧師館の玄関で座って、奥に入ろうとしないんだ。理由の一つは、うちのやつが苦手でね、いつも生活習慣を改善しなくちゃだめだ、規則正しく生活をしなさい、お酒をひかえてきちんと食事をとりなさいって、健康チェックされるのをうるさがっていたんだ、アル中気味で赤ら顔だったから、言われるのも当然なんだけど、「センセイ、よくあんな口やかましい女と暮らしているな、けっ」とか毒突いていたよ。玄関で娘たちにオセロゲームの相手をさせられたりしていたけど、子どもだから手加減せずに攻めるんで、たいていかーやんの負け、すると本気になって腹を立てるんだ、すると子どもたちはそれを面白がって、からかったりする、「このうちの女どもは、みんな気が強くて、ろくな家族じゃねえ、何とかしろよ」とか後で言われたりしてね。

どんな人も積極的に受け入れる方針だったから、教会には中国人、フィリッピン人、スリランカ人、キリスト教徒に改宗したイラン人たちが集まってきたんだけど、かーやんは意外にそういう人たちと早く馴染むところがあって、役割も増えてきたんだ。それはとてもぼくにとっても嬉しいことだったね。相変わらず日曜の礼拝では、一番後ろの席で聞いているんだけど、珍しく説教の感想を伝えてきたことがあった。

「センセイ、あのさ、話がくどいよ。はっきり言えば、わかりにくいぜ。知ってる？ 誰も聞いちゃいないよ」

「そうか、まずいね。反省しないといけないね」

「反省して、どうにかなるもんじゃないだらな。あのね、ムシヨを出所するとき、朝礼で残った受刑者に挨拶をする行事があつてな、前の日から原稿なんて念入りに用意するやつの話なんか、たいていだめだ。とてもくどくて聞いちゃいられねえよ。準備した話はたいてい長くて、まどろこしくて、人には伝わらん。その日その時のお天道さまのご機嫌、風の音、雨ならじっとり湿った空気とか、そうしたものを感じながら、心にさ、自然と浮かんでくることを話せばいいんじゃないの、その方が人に伝わるよ、気持ちをこめた短い話、ムシヨじゃ、そういうものが心を動かしたんだ、それって、どっか聖書に書いてないの？」

これにはまいったな。その通りと思ったからね。細々と準備しすぎた話は、確かにくどくなるし、聞く人の心に届かないことが多いからね。

そう忘れていた、かーやんが「おふくろは来たか」って訊ねたときがあったでしょう、それから2カ月くらいたってから、平日の昼間なんだけど、母親が現われたんだ。教会の後の席でひっそり座っている白髪の老婦人がいてね、後から思い返すと不思議なんだけど、かーやんがいつも座る場所のさ。何か怯える感じで身を縮めているんだ。

「こんにちは、お祈りにいらしたんですね、どうぞ続けてください。私はあの執務室の奥にいますから、何かお話があれば、ご遠慮なくいらしてください」

「はあ、それはどうも。おじゃまして、すいません。あの一、お聞きしたいことがあります。あの一、こちらに梶木実というものが、来ておりませんか？」

「はい、いらしていますよ。もしかしたら、梶木実さんのお母様ですか？」

「はっ、そうです。あの一、こんな時間にも来ますか？」

「ええ、いらっしゃるときもあります」

「じゃ、それは困るんで、もう失礼します」

「いえ、大丈夫ですよ、牧師館の方に移りましょう、実さんが来たら裏口から帰ればいいですから」

母親の話は途中であちこちに飛んで、ときどきコンテキストが掴めなくて混乱したけど、整理するとこんな具合だったかな。佐賀で暮らしていた郵便局員の夫とは死別し、それから関西、静岡、埼玉と移り住んだ。かーやんは、少年時代から乱暴者で、姉二人とも喧嘩が絶えなかった。実は、姉妹とは父親違いで、母として情けないことだが、かーやんの父親が誰か判らないという。息子がこの教会に来ていたらしいという話は、長女から伝え聞いた。そう、話し忘れたけど、あの後から妻がね、長女にもう一度電話をかけたわけね、結果は同じさ、すごい剣幕で電話が切れた。でも、かーやんの消息は伝わったと思う。だから、母親が聞きつけて、現われたんだね。とにかく、「あの子は元気であるか」って繰り返し聞くのさ。「お会いになったら、いかがですか？ いくらでも間に立ちますよ」と言うと、血相を変えて、「それは、絶対にやめてほしい」と帰り支度を始める始末さ。わけを聞くと、そのはずだと思った。

「口だけで、あんたんこと、いっちゃん好いと一、なんて言っても通じません。暴れると、抑えようがなくて、こん、ふうけもんって、そしたら首は締めるし、殴るし、毎日がこんなです、しまいには、あたしも頭がおかしくなって、そんで……、いーや、これは言えません」

「ええ、ご無理におっしゃらなくてもいいんですよ」

「はい、まあ、あの一、ご存じのように、あの子の顔、ひどい傷がたくさんありますでしょ。高一のときです、寝てる顔見ると、いろいろおそろしくなって、あんまりにも憎たらしくなって、こっちの頭もくるっておって、この私が包丁であの子の胸と顔を切りつけて……、はあ、この私が切りつけて、もう一緒に死のうと思ったんです」

「そう、そうだったのですか」

近所を巻き込む大騒ぎになり、母は警察に逮捕され、服役することになった。それからどうだったかな、刑務所に何年いたかは、覚えてないけど。

かーやんはホームレス同然の身になって、やがて関西一帯を縄張りにするヤクザの部屋住みになったんだ。それにしても、胸が痛んだのは、かーやんの顔の傷のこと、ヤクザ同士の抗争でやられたって、はっきり言っていたけど、母親に切られたなんて、一度も口にしたことはなかったよ。どういう母への思いからなんだろうね。

教会には気まぐれにやってくるんだけど、しばらく姿を見ないなって思っていると、交番で暴れて検挙されていたり、日中にふらりとやってきて、ちょうどこっちは電話で教区の上司とやり合ってい

るときもあってね、あいつはじっとそばで聞いていたんだけど、後で険しい表情で言うのさ。

「なあ、センセイ、何かあったんだな。いつ会議に行くんだ？ もめ事なら俺に任せおけ。ちゃんと話をつけてやる。いっしょに行くぜ。忘れちゃいないだろうな、俺はトラブル解決のプロだからな」
「きみ、そういうことじゃないんだ。何を勘違いしているんだ」

かーやんは、もめ事が大好きで、口達者だし凄みのある風采だし、もめ事に介入する天与の才があると自負していたんだけど、まったく困った男だったよ。もめ事、それ行くぞ、俺の出番だと思っているんだから。しょせん、脅して相手を屈服させるだけなんだから。

そう、こんな出来事もあった。テヘランで、イスラム教からキリスト教に改宗して日本に逃れてきたイラン人の青年ね、教会でサポートしていたんだけど、難民申請の交渉に横浜の入国管理事務所に行くことになったとき、かーやんが現われて、一緒に行くと言い張るんだ、面倒臭い交渉だし、かえって煩わしいので、自分一人だけの方がいいって断ったら、邪魔はしないし、何事も勉強だからついて行くって粘るんだ。このころ、ちょっと迷惑なところもあったんだけど、牧師の日常業務に妙に関心を持ち出してね。コピーを揃えてくれる程度ならいいんだけど、かえって面倒なこともあった。このときもそうだったけど、仕方なく一緒に行くことになった。

案の定、役人はひどく横柄で、資料を見せながらいくら説明してもらちがあかない。そばで様子を見ているかーやんの怒りが爆発しそうでひやひやさ。結局、出直すことになって、入管近くのレストランで昼食をとることにした。テーブルに着くと、奥の方に詰襟の黒い服を着た連中が五人ばかり座っていてね、何やら相談しているのが見えた。すごい偶然なんだけど、教区の司教たちで、皆がりがりの保守派で女性司祭に反対している困った連中なんだ。

「また何か悪いこと相談してんだな」とぼくはおつおつ言いながら、かーやんを席に残して挨拶に行っちゃったわけ。いきなりうるさいやつが意外なところで出現したものだから、お偉いさんがた、驚愕して固まってしまっただけで、でも、この方々にすれば、もっと驚くことが起こったわけなんだ。かーやんが、すごい形相でやってきたのさ。

実は、このとき初めてかーやんの、もめ事介入の現場に立ち会ったけど、怖ろしい声の迫力で、こちらまで震え上がるほどでね、首を振りながら顔を突き出して、両肩もいからせながら左右に揺らして、怒声を浴びせるんだけど、何というか脅しの身体の所作が、これもまた怖いんだ。

「センセイさ、こんな連中にべこべこするなよ。てめらよ、ふざけんじゃねえ、このやろう、外国人に弱いものいじめしやがって、ぶっ殺してやる、表に出ろ」

まあ、そんな調子でね。偉い方たちは恐怖で引きつっているし、ひどく焦ってしまった。かーやんは、外出用の司祭服を税関の制服と早とちりして、暴走してしまったんだ。とにかく、店員だってびくりするし、大パニックだよ。

「何してんだ、この方々は、ぼくがお世話になっている司祭の皆さんだ、勘違いだよ」

ひたすら平身低頭、帰りはさすがにかーやんは、何もしゃべらず恥じていて、可哀想だった。でもね、正直言って、ちょっと痛快な出来事だったな。いや、それが教区で問題になったんだ。国分寺の教会はヤクザを用心棒にして連れまわし、それと外国の犯罪者も集め、反社会的連中の巣窟になっているって。あまりに下らないから、笑って放置していたら、教会員の人たちが抗議文を書いてくれて、おかしなスキャンダルにはならなかった。

その一件から、しばらく、かーやんは物静かな人間になったけど、やっぱりだめで、元の脅し体質に戻ってしまうんだ。やっかいなもんだよ。

困るのは、昼となく夜となく、勝手気ままに教会にやってくることで、深夜に牧師館に来るのには

まいったよ。2時ころに、酔っぱらって来たこともあってね。

「飲み屋でよ、けんかになってさ、話を聞いてもらおうって思ってな」

「何時だと思ってるの？ 非常識もきわまるよ」

「けっ、常識ね。くだらねー。そんなもん、俺があるわけないだろう。よく知ってんだろが……」

この瞬間、思わず手が出て、かーやんの顔を張り飛ばしてしまった。怒りやら、悔しさやら、はがゆさやら、とにかく、いろんな感情が一つになって暴発したんだけど、でも、そのときはとっさのことで、何だかよく分からない。ただ、牧師という自己認識も役割も、あっけなく解除されてしまったことだけは確かだと思う。もちろん、かーやんから強烈な反撃を受けて、よりによって真夜中に教会の庭で取っ組み合いになったんだ。いずれはこうした対決の仕方をしなくちゃならないときが来るかもしれないって、うすうす予感というか覚悟みたいなものはあったんだけど、暴力の当事者になってみると、動きの瞬間ごとに襲ってくる恐怖心は底知れないものがあった。

で、どうなったか？ 格闘のさなか、妻の声が聞こえたんだよ。

「もう、そのへんで止めて。ねえ、止めなさいってば。警察に連絡するわよ」

寝間着にガウンをはおって、男たちの狼藉ろうぜきを悠然と眺めていたのさ。

「だめだ、呼ぶな」

言われたこっちも、わざとらしいほど冷静になった。かーやんも「警察」の一言で我に返ったのか、「呼ぶな」に安堵の心情が動いたのか、急にしゃがみ込み、膝を抱えて坐った。

おかしなもんだね、かーやんの顔に張り手をした、その掌のざらついた感触がね、その後、いつまでも残って気分が悪いのさ。こんなことに苦しむなんて、まったく意外だった。

当のかーやんね、急に心を入れ換えたとはでは言えないけど、普段の日に教会へ来るときは、前もって電話を入れるようになったんだ。しかもますます牧師の仕事に関心を持つようになってね、何かにつけ手伝いたがるんだよ。

あれはいつだったか、今みたいな新緑が目眩しい季節だったかな、新宿の病院に行く支度したくをしていたんだ。青年時代から熱心な信者さんで、北区の福祉施設で事務長をなさっている矢口さんという、まだ50歳前の人なんだけど、末期癌でいよいよ天に召される時が近いと、家族の方から連絡があった。だから、お祈りに向かうところだったわけね。

夜の8時ころになっていたかな。そばで様子を見ていたかーやんが、自分も一緒に行くと言い出したのさ。厳粛な祈りの場所だし、何をするか予測ができない男だし、いくら何でもそれは困るわけね。どのような生き方をしてきた人で、どのような病状か説明をすると神妙な顔をして、いったんは「わかった」と言った。ところが、「邪魔にならないように、待合室で待っているから同行する」というのね、それじゃ仕方ないと思って一緒に病院へ向かうことにしたんだ。

かーやんは、廊下のベンチで相変わらず神妙な顔つきで腰を下ろした。「じゃ、センセイ、行ってらっしゃい」なんて珍しく殊勝なことを言った。病室には夫人と高校生の一人息子さんが待っていて、青白く光るモニター画面の波形がやけに生々しかったのを覚えているよ。何度も経験してきた最後の祈りだけど、慣れることなんか一度もないし、ひどく緊張するんだ。祈りの最中、矢口さんは静かに眠っていたけど、呼びかけると耳が聞こえている感じがかった。

それから、ご家族にお礼を言われているときだったか、とんとんってドアにノックの音がしたんだ。無作法な音の響きから、すぐにあいつだって、わかって焦ってしまった。ドアが開き、狂暴そうな体の知れない男が現われ、挨拶もせず部屋を進んだ。三人ともあっけにとられている間、ベッドの脇に膝をついて身を寄せ、たぶん入口にかかっていた名札を確かめたんだと思うけど、上ずったとき

れとぎれの声で呼びかけたんだ。

「ヤグチ、ケンジさん、こ、これまでの人生、ほ、ほんとに、ご苦労様でしたー」

そう言うなり、かーやんは矢口さんの手を握って一礼すると、私たちには無言のまま恥じ入るように部屋を飛び出していった。ご家族にお詫びして事情を話したところ、意外な返事が返ってきた。

「びっくりしましたが、ぼく、とても感動してしまいました」

「ええ、とてもお気持ちのまっすぐな、心のこもった言葉をかけていただきました」

後で聞いたことだけれど、前日に勤務先の理事長が見舞いに訪れて、「おや、まだ元気にいるんだね」と言ったというんだ。これは「なんだ、まだ生きているのか」という意味にも取れて、父は耳が聞こえていたはずなのに、無神経だと息子さんはひどく憤慨していたそうなんだ。

かーやんは、ぼくに叱られると思ったのか、一人で先に帰ってしまった。それどころか、しばらく教会にも来なかった。翌月、バザーがあって、ひょっこり手伝いに現われたのだけれど、病院での出来事には触れなかったし、ご家族が心打たれたという話も、あえて伝えなかった。

それから、知ってのとおり、家族そろってイギリスのダラムの教会に行くことが決まった。正式な発表の前に、かーやんには早めに伝えることにしたんだけど、どういう事態なのか、すぐに呑み込めない様子でうなずくだけで、「しばらく、イギリスに引っ越すことになった」と言い直したとたん、険しい顔でにらみつけるんだよ。

「そんなこと聞いちゃいないぞ」

「最近決まったことだし、それにこの話をするのは、あなたが最初だよ」

「いつ、また日本に戻るんだ？」

「たぶん、4年後かな」

「なに、4年間も行くのか」

「やめるわけにはいかないのか？」

「それは無理だよ。教区から託されたミッションだからね」

「わかった」

案外とあっさり納得したので、その時は安堵したのだけれど、顔を合すたびに「お偉いさんたちにさ、行きませんって、いつ返事するんだ」などと、よじれた言い方をする。また、しばらくすると、「おい、俺もイギリスに引っ越すことにしたよ。一緒に行くぜ。いいな。役に立つぞ」と凄んだりね。それでも、出発が近づくにつれて、荷物のダンボール詰めとか、本の廃棄とか手伝ってくれた。そして、いよいよ別れの日が迫ったころ、こんな願い事を言ってきたのさ。

「センセイ、俺さ、イギリスと一緒に行くのは、もうあきらめたよ。その代り、頼みがあるんだ。いいかな？」

「はい、ぼくに出来ることなら、何でも喜んでするよ」

「そうか、じゃ、頼むか。あのな、俺と一晩いっしょに寝てくれないか？」

「えっ、何？ それって、どういうことなの？」

「どういうことって、決まってるだろうが。いっしょに寝ながら、朝まで語りつくすんだよ」

「わかった、いいよ。そうしよう」

それで、家族に教会の執務室へ布団を二組運んでもらって、かーやんと一晩過ごすことになったわけなんだ。

何を話したか？ それが、かーやんの一方的な話でね、ほら、猫のポチね、壁紙がはがれたって、もっと自由に爪とぎさせた方がいいとか、タオルが置いてあると枕みたいにして寝る癖があるとか、前の

司祭が飼っていたピアデッドコリーは、遠くからでも自分だとすぐわかって、いつも嬉しそうに待っていたとか、子どものときに仲良しだった近所の柴犬のテツとかいう犬の話とか、付き合ってきた歴代の犬猫の話題が続いてね、こちらはウトウトして、また目を覚ますと、まだ同じ話なんだよ。いい加減、眠気には勝てなくて、寝入ってしまったんだけど、朝早く起きると、もうかーやんはいなくて、寝具がきちんとたたんであった。これは刑務所で身についた習慣なんだろうね。それにしても、かーやんにとって、この一晩って、どんな意味があったのかね。結局、あの男に会ったのは、それが最後になったんだ。

ちょっと、トイレに行ってくるね。ああ、またそのことか、大丈夫だよ、最近は間違えないから。うっかり女性トイレにとびこんで、あわてて脱出する、それはね、スカートとズボンの表示が、わかりにくいからいけないんだ。はい、はい、早く行きますよ。

無事に戻りました。それで何だっけ？ かーやんのその後ね。イギリスに行ってから、しばらく教会には来なくなったらしいんだけど、またひょっこり日曜礼拝に現われるようになったそうなんだ、ときどき新しい司祭に聞いたわけなんだけどね。しかも、その年の暮には、洗礼の相談を受けたっていうんだから、びっくりしたよ。でも、相談だけで話は進まなかった。自分のような牧師の立場で言うのも変なんだけど、それはね、どっちでもいいことじゃないかな。今にして思えば、かーやんは、そういうことに関係のない、何か世人をこえた強靱な魂の持ち主だったような気もするんだ。生きていれば、どんな老人になったか、まったく想像もつかないな。

イギリス生活が1年になった夏の終わり、ちょうど夕食が済んだころ、国分寺の教会から連絡があつてね、かーやんが亡くなったって。小さな川なのに、落ちて死んだというんだ。きっと、酒でも入っていたんじゃないか。そういえば、あの布団を並べていっしょに寝た夜にね、大阪にいたころ、川に落ちた猫を助けた話もしていたのを思い出すよ。ことによると、同じようなケースに出くわしたのかもしれない。

亡くなったって聞いた夜、聖堂に入って、朝になるまで、かーやん、いや、梶木実さんのために祈りを捧げたんだ。もちろん、今度は微^{まどろ}睡^{どろ}んだりしなかった。

執筆者について――

中村邦生(なかむらくにお) 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には、『チェーホフの夜』(2009年)、『転落譚』(2011年)、『幽明譚』、『ブラック・ノート抄』(いずれも2022年)などが、批評には、『未完の小島信夫』(共著、2009年)がある。